

令和七年一月

大学院文学研究科

佐々木 健策 提出 学位申請論文（論文博士）

『戦国期小田原の城と城下町 遺跡と景観にみる

戦国大名』審査報告書

國學院大學

佐々木 健策 提出 学位申請論文（論文博士）

『戦国期小田原の城と城下町 遺跡と景観にみる戦国大名』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、戦国大名権力が本拠地として形成した都市の景観を、歴史地理学的な手法を用い、文献史学・考古学の成果を積み上げて検証したものである。また、その都市が形成されるに至った背景や経緯を大名権力の施策から抽出し、戦国大名がどのような考え方や志向性により都市の創出を行ったのかを明らかにした。考古学的な遺跡の情報を用いることで年代観を明確にし、社会構造や文化面からのアプローチを取り入れるとともに、点的な知見が主体である考古学的な情報を地理学的に総合して、面的な空間把握を試みた。これにより、地域の特性を把握し、より具体的な都市景観を見出すことができる。

以上の研究目的・研究手法に基づき、本論文は序章・終章を含めた六章で構

成した。第一・二章では大名権力の本拠地創出に際し、どのような考え方・志向性が存在したかを探った。第三・四章では、具体的な都市景観について論じ、都市領域がもつ意義について検証した。そして終章では、全国的な視点で戦国大名の本拠地を概括し、検証事例の相対化を試みた。

まず序章「戦国時代の都市」では、研究対象として関東の戦国大名北条氏を取りあげ、その本拠地であった現在の神奈川県小田原市を対象とすることの意義を論じた。

関東では、享徳三年（一四五四）に始まる享徳の乱を契機として戦国時代となる。北条氏自身、享徳の乱以降の混乱に乗じて関東に進出した一族であり、初代伊勢宗瑞は明応の政変（一四九三）を機に関東への足掛かりを得ている。また、戦国時代の終わりは、豊臣秀吉による天下一統の画期である天正十八年（一五九〇）の小田原合戦が定点とされる。以上の点に着目すると、まさに北条氏の存在そのものが、戦国時代の歴史を考えるうえでの典型例と評価できる。したがって、北条氏の事績を追うことは、戦国時代という時代の展開や画

期を概観するのに適している。以上をふまえ、戦国時代を中心とした中世都市研究の研究史を確認した。

特に一九七〇年代以降に網野善彦氏が提唱した「都市的な場」の視点による空間・性格の相違を踏まえた都市の捉え方、「時の断面」による景観変遷を踏まえた空間分析の重要性を指摘し、一乗谷朝倉氏遺跡の成果を例に、考古学の成果を用いることが有益であることを説いた。また、都市小田原を対象とした研究史を整理し、二〇〇〇年代以降、仁木宏氏が主導する守護所研究での位置づけに疑義を提示し、小川信氏の中世府中研究に依拠して「守護所」という都市像に対し、問題提起を行った。戦国時代の小田原は「相模府中」「相府」を称している。そのため、小田原が相模府中を称するに至る経緯と系譜を確認するとともに、守護職を持たない北条氏が小田原を「府中」と称した意味の重要性を指摘した。

第一章「戦国大名北条氏の志向性」では、北条氏の志向性の変化を捉えるため、十六世紀前葉の二代目北条氏綱と十六世紀後葉の四代目北条氏政に着目

して論を進めた。

小田原を本拠地と定めた北条氏綱は、神社仏閣の造営を行うことで民心の掌握を図り、「北条」を名乗り「関東管領」を称することで関東統治の正統性を主張した。そして、官職の取得、人物や文物の移入などを通じ、京都・幕府を中心とした先進地域・旧体制を背景に権威を確立していく過程を明らかにした。

北条氏は下剋上の戦国大名の先駆けのようにもみなされるが、実は朝廷・幕府、あるいは関東府などの伝統的権威を意識し、それを利用することで自らの家格の向上、正統性を主張したのである。このような点は発給文書の内容からも推察できるが、本論文ではこれに加え、北条氏所持を伝える文物を取り上げ、北条氏がどのような意図で文物を用いたのかを考察した。

氏綱は、京都との関係などを通じ、先進地域より人物・文物を積極的に小田原へと移入した。それにより領国内における本拠地の存在感を表出させ、小田原が領国内における首府都市であることを明確にしたのである。これに対し、北条氏政は旧体制への依存から、独自のアイデンティティーの構築による新た

な価値観の創出、利用へと考え方を変化させた。その背景には、武田氏・上杉氏との抗争の展開、室町幕府の衰退・滅亡の中で、伝統的権威を背景とした領国支配体制に限界が生じたことが挙げられる。

本論文では、氏政発給文書から氏政の性格を分析するとともに、氏政が城館の築城・改修に積極的に関与している状況を証した。文書から導き出した氏政の性格は凡帳面かつ繊細であり、小田原合戦の敗者として語られる氏政の性格とは異なる側面がある。そのうえで、文献史料の記載から氏政の関与が確実な堀の発掘調査事例を検証し、遺構の形態からも氏政の性格に迫った。

氏政は後に「小田原物」と呼ばれる小田原産の文物にステータスを付与する独自のヒエラルキーを構築した。具体的な「小田原物」としては、兜鉢や刀、天明釜、絵画、漆器などがある。文献史料でこれらの使用形態を直接知ることには困難だが、伝世品の分布状況などから、小田原で製作されたモノ、小田原で購入したモノがステータスを帯びて評価・利用されていた状況を示した。

小田原城跡御用米曲輪下層で確認された独創的な遺構群は氏政の時期に相当

するものであり、それらが伝統的な手法に捉われない独創的な考え方で構築されていることは、氏政が京都志向から独自の価値観の創出、利用へと志向性を変化させたことの傍証となる。

第二章「モノにみる領国支配の諸相」では、第一章でみた北条氏の志向性を出土遺物の様相から確認した。

関東地方では、北条氏の支城館での発掘調査も多く行われている。その成果から、それぞれの城館で出土しているかわらけ・陶磁器の出土点数を集計し、地域ごとの特徴を明らかにした。そして、その数値を基に、かわらけの出土比率が高く、貿易陶磁の出土比率が低いという特徴に着目し、貿易陶磁・かわらけから北条氏の領国支配の実態に触れた。

貿易陶磁については、氏政の書状から「雖不珍候」と称しつつ、青磁などを贈答品として用いていることが確認できる。しかし、発掘調査成果の集計では貿易陶磁は関東地方では極めて貴重であり、小田原においても多くはない状況が確認できる。そのような状況にあって、「雖不珍候」と記して陶磁器を贈答

品として用いている様子に、先に見た氏政の性格を垣間見ることができる。

かわらけについては、関東地方では一般にロクロ右回転で成形したかわらけが用いられている。そのようななか、北条氏は京都系と評価される手づくね成形のかわらけを導入しており、小田原では関東地方に系譜が確認できない手づくね成形のかわらけや、それを模倣したロクロ左回転成形のかわらけが多数出土している。

かわらけは「使い捨て」の土器であり、生産地と消費地が近く、遠隔流通しない土器であることが知られている。しかし、北条領国では、天正年間になると各支城館でも小田原で生産されたかわらけが持ち込まれている状況が確認できる。しかもその出土状況は、主郭・宗教施設などの主要空間に限定的である。また、小田原の土とは異なる在地の土で、小田原のかわらけの模倣品が作られている状況も確認でき、小田原のかわらけが求められ、真似される存在であったことがわかる。

小田原のかわらけが特別な価値観と役割をもって利用され、求められていた

様相は、第一章で述べた氏政の志向性に通じるものである。小田原産のかわらけはまさに「小田原物」であり、小田原産であるという価値観を纏わせ、領国内で用いられていたのである。

このような検証を行えたのは、関東地方に点在する領国内の遺跡の調査成果の蓄積が大きい。本拠地である小田原でも六百箇所以上で発掘調査が行われており、本拠地の他に支城館の発掘調査事例がこれほどまでに集められる地域は、全国的に見ても皆無である。これを基礎資料とすることで北条領国における社会構造や文化が垣間見えたものであり、文献史料の分析だけでは確認しえなかった北条氏の領国支配の一端が確認できた事例である。

第三章「戦国都市小田原の景観」では、具体的に戦国都市小田原の景観について論じた。

小田原は、近世以降も城下町・宿場町として利用され続けたが、度重なる自然災害による被災・復興を繰り返しており、戦国時代の景観は大きく失われている。そのため、まず近世以降の小田原城及び城下の改修履歴を確認し、確実

に戦国時代に遡る景観を明確にした。

併せて、戦国期の面影を残す時期に描かれた「相州小田原古絵図」と、寛永十年（一六三三）の寛永小田原大地震による被害・復興後の「相模国小田原城絵図」、「明治十九年測量地形図」を比較し、戦国時代まで遡る可能性のある道路が正方位軸にのることを指摘した。

以上の点を踏まえ、発掘調査成果から区画を示す可能性のある戦国期の道路状遺構・堀・溝状遺構を抽出して、それらが正方位を基本とし、方格地割を有している様相を明らかにした。この方位軸は、十七世紀前葉に変化しており、小田原の町割が十七世紀前葉を境に、正方位から二五〇度変化していることを証した。その変化は、小田原の改修履歴や絵図の分析から、寛永小田原大地震の被災と復興を画期としていと考えられ、戦国時代の小田原は正方位・方格地割を基軸とした町割であり、その景観を失ったのは寛永小田原大地震によるものと結論付けた。

そのうえで、藩校集成館跡周辺や杉浦平太夫邸跡・大久保弥六郎邸跡におけ

る遺構の展開や文献史料の記載から、区画内部の構造を検証するとともに、文献史料や発掘調査成果から比定し得る居住者の職能と分布を示し、戦国期の小田原では職能・身分などによる住み分けが不十分であることを証した。

そして、このような都市景観形成の背景には、第一章で確認した氏綱の志向性が関係していると想定し、領国の首都として可視化された権威の演出であると捉えた。北条氏は守護としての系譜を持たない大名である。そのような北条氏が都市を創出する際に規範としたのは、仁木氏の言う「守護所」の論理ではなく、京都の將軍邸・幕府の論理であり、一国の首府たる「府中」であったのではないかと論じた。

このような小田原の事例から、戦国大名の本拠地とは、大名の志向性を具現化した権威を表徴する景観を呈するものであると考えられる。北条氏は小田原を「相府」「府中」と称し、正方位・方格地割の都市景観を形成することで、他の戦国大名や諸勢力に自らの権威と志向性を示したのである。

第四章「都市小田原の領域」では、小田原の代名詞とも言える総構とそれが敷設される位置の空間論理を検証した。その結果、総構に囲まれた範囲が氏綱

によって設定された都市域を基本として、三代氏康・四代氏政によって展開された都市域であることを示した。

それを証明するため、本章では小野正敏氏による小田原の空間概念論を取り上げ、それを検証・補強する形で論を進めた。小野氏は、西郡明神社・居神明神社・松原明神社・山王社（北条稲荷）を四至として小田原の空間構成を捉えている。小野氏は神社の立地を重視して空間構成を捉えたが、各社個別の系譜や評価検証は不十分であった。そこで、各社の系譜や変遷を確認することで各社の位置づけを明確にした。その結果、各社の存在が小田原の都市域の変遷を示す可能性があることがわかった。

元々小田原という都市空間には、居神明神社の前身である居之大明神と妙福寺を配した大窪地区に先行都市域が存在した。そして、氏綱によりその東側に新たな都市が形成された（中心都市域）。その際に松原明神社が現在の位置に鎮座することとなり、氏綱により設定された中心都市域は、第三章で述べた正方位・方格地割が確認される範囲とほぼ一致する。発掘調査成果からも、中心

都市域では十六世紀前葉を遡る遺構は検出されておらず、北条氏の小田原進出以前の土地利用が確認できないという点は、この変遷案の大きな根拠である。その後、氏康・氏政期に都市域は東側へと拡大し、新興都市域が成立する。これは、東側に立地する山王社・北条稲荷の経歴から指摘しうる。

以上の発展過程を経て、氏政段階に西郡明神社・居神明神社・松原明神社・山王社（北条稲荷）を四至とする都市域が成立することになる。そして、この範囲こそが後に総構に囲まれる範囲と重なることを証した。一方で、総構の外域とされた地域には、不遇の死を遂げた人物や怨霊となった人物を祀る社や長吏持ちの社が展開する（都市周縁域）。小田原城の総構は対豊臣秀吉防衛線ではあるが、小田原の都市域と都市周縁域を分ける意味合いもあったと評価できる。そもそも総構とは「外郭線」のことであり、文献史料上の初見は畿内近国で確認でき、その用途は寺社や集落の囲郭であった。それが城館に用いられるのは天正年間以降であり、決して小田原独自のものではない。本章では、その点を文献史料の記述や発掘調査事例を交えて証した。

また、小田原の総構を文献史料上「総（惣）構」と記した一次史料はなく、韮山城・岩付城の事例から、北条領国では外郭線を「大構」と呼称した可能性が指摘できる。そして、文献史料の検証から小田原の総構（大構）は天正十五年から構築され、天正十六年二月には完成していたとみることができる。

これにより設定された総構（大構）は、先行都市域であった大窪を郭外へと位置づけることとなった。大窪が郭外となることについては、長らく総構西側の位置を考えるうえでの疑問点であった。しかし、大窪を小田原の先行都市域と位置づけることで、既得権益をもつ先行都市域は、都市小田原の発展過程において役割を終えていたと評価する新たな考えを示した。これは、小田原は松原明神社の門前町を起源とする指摘されていた従来の説を否定するものでもあり、これにより戦国都市小田原の発展過程を明確にしえた。

終章「都市から戦国大名を考える」では、本論文の成果を整理しつつ、現状の到達点として小田原と比較検証しうる他地域の事例を確認し、全国的な大名権力の本拠地の様相と大名の志向性について考察した。

全国的に見た場合、豊後府内・周防山口・阿波勝瑞・越前一乗谷・甲斐甲府・越後春日山・駿河駿府・陸奥梁川などの大名本拠地で景観復元が行われている。しかし、いずれも「文献歴史地理学」による検証に留まり、本拠居館跡の発掘調査は行われていても、城下での発掘調査が不十分で、「考古歴史地理学」としての検証は行えない状況にある。そのため、本論文で検証した小田原の事例と比較するには条件が不足しているが、その中で、城下での発掘調査成果の蓄積があるのは、越前一乗谷と豊後府内のみである。この二都市と小田原を比較することで、戦国大名の本拠地と本拠創出における大名の志向性の相対化を試みた。

その結果、城下空間の規模や武家地・町屋の規模などに共通点と相違点を見出すことができる。「〱小路」と呼称する街路により区画された計画的な都市の姿には共通性があり、北条氏が京都を志向し、それを表徴する本拠を求めた「京都らしさ」と同等の志向性を見出すことができる。

しかし、小田原と一乗谷・豊後府内の比較だけでは検証事例としては不十分

である。そのため、儀式・儀礼の舞台装置であった庭園に着目し、前記三都市の他に発掘調査で居館から庭園遺構が確認された大内氏の周防山口と阿波細川氏（三好氏）の阿波勝瑞の事例を取り上げた。

その結果確認されたのは、京都の権威と大名の権威を表徴する装置としての庭園の機能であった。これらの検証により、京都を志向する戦国大名の志向性は共通しており、小田原で確認できた状況は各地の戦国大名の本拠地でも確認しうる可能性がある。それは、大友氏や大内氏のような守護大名から戦国大名となった大名の本拠地だけでなく、小田原や朝倉氏の越前一乗谷のような下剋上の「当世風」戦国大名の本拠地にも指摘できるものである。

こうした戦国大名の本拠地の姿は、まさに一国の首都たる都市景観を示すものであり、それは「府中」に通じる。守護職が形骸化した戦国時代において、「守護所」の系譜よりも、むしろ一国の首都である「府中」の系譜を継承することこそ、戦国大名が本拠地を他の都市と差別化するための手段であった。小田原の事例は、戦国大名の本拠地がその志向性を表出する権威表象装置であったこ

とを如実に示すものといえる。

本論文では、文献史学・歴史地理学・考古学という多視点からの分析により、個別分野だけでは見えなかった情報が浮き上がり、新たな戦国時代像を描き出すことができた。長い文献史学の研究蓄積があり、発掘調査の蓄積による多くの情報を有する小田原だからこそ検証できたことでもあるが、考古学により見出された年代観を根拠とし、歴史地理学的手法を用いて総合的な分析を行うことの有効性を示すことができたと考ええる。

論文審査の結果の要旨

学位請求論文、佐々木健策著『戦国期小田原の城と城下町』は、近年著しく進展した考古学的な調査研究の成果を踏まえ、小田原城および小田原城下町の成立・展開過程と、その歴史的な意義を明らかにした著作である。

わが国の都市発達史上、大きな画期となったのは近世城下町の成立であったが、その形成過程に関しては意外に明瞭ではない。先駆形態である戦国大名の拠点城郭や城下に関わる同時代史料が断片的であることに加え、近世城下町に継承されるに際し景観には少なからぬ改変が加えられてきたため、戦国城下町の精細な復元はきわめて困難であった。そのため、戦国期の城郭・城下の形成と発展、さらに近世城下町への変容を長いタイムスパンで観察しうる事例研究の蓄積が求められてきたのである。

しかるに近年ようやく各地の戦国期の城郭や城下に関する歴史考古学的な発掘調査が本格化し、多くの新たな知見が共有されるようになってきた。その先

駆けとなった越前一乗谷城下の事例は、「実像の戦国城下町」の典型例（モデル・ケース）として、広く受容されている。しかし、近年各地で調査研究が進展したことにより、一乗谷の研究成果のみでは理解できない多様な戦国期城下町の姿が明らかになってきており、それぞれの城下町をどのように解釈し、戦国期の社会に位置づけるかが大きな課題となっていた。

永正十五年（一五一八）以降、広く関東一円に拡大される北条氏の領国支配の首府として発展した戦国期城下町、相模國小田原は、こうした研究史上の課題に応えうる好個の事例であり、近年の注目すべき発掘調査の成果を総括するとともに、文献、絵図などの関連史料の歴史地理学的な総合を図った佐々木氏の論文は、まさに時宜を得たものといえる。これにより、戦国期城下町研究は越前一乗谷の事例を相対化するためのもう一つの参照軸を得ることとなった。

序章では、戦国都市研究における仁木宏氏の「守護所」系譜説へのアンチテーゼとして、守護所の系譜はもたないが、様々な「都市的な場」形成の契機が併存した小田原の「府中」化、すなわち一国の中核都市化の過程が整理されている。

小田原に拠を置いた二代北条氏綱、四代北条氏政の人間性や志向性から城郭普請や輸入陶磁器・かわらけなどの消費文化の変遷を解く第一章・第二章は、考古学的な遺物・遺構から戦国大名の個性にアプローチする試みとして、興味深い事実を引き出すことに成功している。とりわけ第二章で、関西では決して珍しくない舶載陶磁器が関東では希少価値をもった威信財として贈答に用いられていたこと、また関東の北条領国内において、小田原産の京都風手づくねかわらけが特別な価値観と役割をもって利用され、求められていた、との指摘も、佐々木氏が関東一円の出土遺物を博搜して明らかとなった知見であり、関東地方における物質文化の特質に論及した点も本論文の重要な成果となった。

第三章は、戦国期小田原の景観復元に際し、近世以降に加えられた景観要素の変化を丹念に追いながら、それらの「上書き」を消去しつつ、それ以前の景観を探る、という歴史地理学的手法を丁寧に実践した成果である。その一例として、戦国期小田原において、複数の方形居館が林立する景観を提示した点は重要であり、ここに近世城下町との本質的な違いの一端が見出される。また、

樹叢から居館や寺院を考察している点も斬新であり、景観復元の新たな視点を提示した点も独創的であり、高く評価できる。

小田原の「総構」を取り上げた第四章では、構築の時期を特定するとともに、そのラインの地形的意味や町の四至を画する神社の系譜との関わりなどを分析し、圍繞された範囲が構築当時一定の都市的発展を遂げた領域であったことを検証した。小田原合戦を契機として「総構」の概念が拡散したという想定も興味深く、今後の「総構」研究の起点として広く参照さるべき論考となった。小田原に先行する都市域と推定される「大窪」が、「総構」内に組み込まれなかったという事実は、小田原の創建都市的性格を物語る重要な論点といえる。

終章は、一乗谷（朝倉氏）、豊後府内（大友氏）、山口（大内氏）、勝瑞（細川氏）など、近年の戦国期城下町や大名居館の研究成果と比較しながら、北条氏の拠点である小田原の特質と意義を、戦国期の社会構造の中に位置づけ、評価しようとする試みである。城下町や庭園の景観に北条氏の大名城権力の特質の表象を読み取ろうとする視角は、戦国城下町研究の今後の方向性を示唆するも

のであり、本書の総括にふさわしい。

以上、本論文の独創性や意義について指摘してきた。総合的に判断して、本論文は現段階における戦国期小田原城・都市小田原に関する最も信頼できる研究成果であり、多くの新知見とともに、今後の斯界の研究に大きな刺激と示唆を与えるものであることは疑いを容れない。

もとより本論文にも、再考の余地を残した問題が散見される。佐々木氏は戦国期小田原に「正方位の方格地割」をもった町割（都市計画）が施工されたと指摘するが、正方位を志向する直線街路の存在は認められるものの、方格地割と称しうるような拡がりをもった直交街路パターンは見出されておらず、表現が適切とはいえない。さらに、この指摘が帰着するところの戦国大名の志向性の一つとして、佐々木氏は「京都らしさ」への憧憬を指摘するが、その解釈・表現もいささか情緒的に傾いた点が惜しまれる。御用米曲輪下層の庭園は、たしかに「京都を中心とした中世の伝統的な作庭の規範から」逸脱するものであるが、そこに各地の庭園との共通点を見出すよりも、「京都指向からの転換」

のあり方を詳細に分析・検討することが、小田原の特質を論じる際には有効であり、各地の戦国城下町の研究にとっても重要な視点となるように思われる。

佐々木氏の研究によって、関東一円を支配した戦国大名・北条氏の権力構造が城郭や城下町にいかに表示されているのか、が明らかになった。こうした分析視角は、戦国時代に限られたわけではなく、平泉や鎌倉などに端を発し、伏見、大坂を経て江戸に結晶する武家政権の中核都市の系譜において、様々な時代の特質をもった権力表象のあり方を把握することができるであろう。佐々木氏は、今後、こうした中世都市形成史の流れを射程においた研究の展開に大きな期待が寄せられるところである。

著者佐々木氏は学部卒業後、小田原市教育委員会に職を得て長く現場で発掘調査を担当し、その成果のとりまとめに従事してきた。多忙な日常業務のなかでこうした研究成果を上梓できたのは、本人のたゆまぬ努力に加え、周囲の温かい協力の賜である。本論文の刊行は、そうした繁忙な環境下で研究を続ける多くの研究者に勇気と刺激を与えるものであることを付言したい。

以上のような所見に基づき、本論文の提出者、佐々木健策氏は博士（歴史学）の学位を授与される資格をもつことを認めるものである。

令和七年一月二十二日

主査	國學院大學教授	吉田 敏弘	①
副査	國學院大學教授	矢部 健太郎	①
副査	國學院大學准教授	川名 禎	①
副査	県立広島大学教授	鈴木 康之	①